

縁分と生きる

～私の小さな日「華」交流と未来～

同志社大学経済学部4年 奈良 あずさ

私が、心から感銘を受け、宝物にしている中国語がある。それが、「縁分」。日本語の「縁」に当たる。すべての出会いはつながっており、その出会いは必然であるということ。出会うべくして出会うべきタイミングでめぐり合った、世界中の中華圏の友人たちに私は未だに恩返し終えていない。自らの一生をかけて、恩返ししていくつもりである。

高校時代から現在までに会って来た香港、中国、台湾、そして華僑の友人たち。彼らとの「縁」という必然的なめぐり合わせで、私は、自分らしく、自信を持って人生を生きていくことの大切さを学んだのである。これからの自分の人生をもっと豊かなものにして、「おかげさまで、私はしっかり根を張って生きています」と胸を張って言えるように、彼らが困ったときにいつでも一助となれるように、今この瞬間も生きている。

中華圏と私のつながりの始まりは、アイルランドの高校に1年間交換留学した時に知り合った香港人の友人だった。大変恥ずかしながら、当時から勉強が苦手だった私は、香港がかつて英国領だったということも、そこでは中国語（標準語）が日常で使われていないことも、世界有数の金融都市であるということも、知らない。ただ、彼女の向上心やグローバルな視野を持った生き方に強烈に魅かれ影響を受けた。遠慮を大事にし、意見を言わないのが美德だと信じ込んでいた自分とは正反対のタイプの友人。彼女が生まれ育った香港って一体「何者」なのだろう？私も彼女のように、欲しいものを欲しいと言い、なりたい将来を堂々と言えるような人間になりたい。そんな漠然とした欲求から中華圏への興味がスタートしたのだと思う。

本学に入学してから中国語を学び始めたが、やはり香港で使われている広東語への興味が尽きず、2回生の夏、思い切って香港中文大学に渡り3週間という短期間であったが広東語課程を履修した。私が思っていた通り、刺激的な街、人々であった。ただ、一番感動したことは自分が「なんとなく」学んでいた中国語が、中文大学の中国人留学生に僅かな

がら通じたこと、そして自分の中国語運用能力の乏しさを改めて知ることができたことであった。そして彼らがとても優しく接してくれたことが大変私の心に沁み、心が熱くなっていくのが分かった。それまでの私には、多少なりとも中国大陸というものへの先入観があったことは確かであった。自分が知らない物事と出くわしたとき、好奇心と不安はつきものである。その不安とは、実体が「見えない」から出てくるものなのだ。私はすでに中国と小さいながら近づけたのである。今度は中国大陸へ行きたくなった。

そして同年冬、めったにないチャンスをいただけることとなった。日中友好協会主催の「日本大学生訪中団」メンバーとして、北京で行われる日中友好条約締結30周年記念式典等への参加事業に参加するチャンスに恵まれたのであった。温家宝首相を間近で見ることができ、また人民大会堂内の夕食会では同世代の党の青年幹部と会話する機会にも恵まれた。何より嬉しかったことは、中国人の友人が沢山できたことだった。中国人民大学や深セン大学といった将来のこの国家を背負って立つ同世代の友人たちと交流を深められたことが私にとっては何よりの刺激となった。

3回生になり、私は本学からの派遣留学生として1年間、香港中文大学で学ばせてもらうことになった。留学中、私は毎日、同じ寮の中国人留学生とコミュニケーションをとるようにした。朝食や夕食を作るキッチンが交流の重要な場であり、この空間で何度も大笑いし、大泣きし、共感しあった。よく日本食を食べてもらいながら、相手の育った故郷や家族のこと、関心事、将来どこで働き何をしたいか、老後はどんなふうにすごしたいか、などあらゆるジャンルの話をした。言葉が堪能でなくても、気持ちを込めて表現したり行動すれば、相手の心には大事なところはちゃんと伝わる。なぜこんな当たり前のことを見過ごしてきたのだろうか。

その時ようやく、アイルランドでの高校留学時代、なぜあれだけ英語が伝わらず相手に勘違いや不愉快な思いをさせたのか、ようやくその理由が分かったのである。言葉のひとつひとつに「伝えたい」という自分の積極的な気持ちがこもっていなかったから、なのだ。日本人同士でのコミュニケーションでも同じであろう。お互いに気心が知れた人間同士だと、つい何も言わなくても分かり合っている気になるものだ。知り合って間もない人とコミュニケーションを図る際に大事な「気持ち」の表示。私は、日本での日常生活でも大事

にしていきたいと思っているし、実践しているつもりである。些細なことだが、相手に感謝の気持ちを伝えるときに、「助かったよ。本当にありがとう。」と言うのか、「あなたがこうしてくれたおかげで助かったよ。ありがとう。やっぱりあなたは私にとって本当に大切な人だよ。」と言うか、どちらがより相手の心に浸みるか。それを教えてくれたのも中国人の友人である。そんなこと恥ずかしいからいえない、なんて本当にもったいない。愛をこめよう。自分が発する一言ひとことに、相手への感謝と敬意の心を込めた言葉をプレゼントしよう。コミュニケーションとはそれによって円滑なり、お互いが幸せになれるのだと私は心から信じている。相手を慈しみながら会話をすると、自然とお互いに笑顔になるものなのだと、留学中にひしひしとを感じる場面が幾度となくあったが、帰国した今も同じように人間関係を構築している。

留学中に、「これは！」と特筆すべきほどに関心したこと、それは中国人留学生の勉学に対する熱心さなのであるが、彼らは勉学だけを大事にしている人間ではなかった。まわりの人への「愛」に溢れている。その愛がひしひしと伝わってきたのが、春節（中国の旧正月）に訪れた中国大陸での日々であった。日本人の友人と一緒に、中国人留学生の実家のある寧波を訪れ、旧正月を3日間ほど共に過ごさせていただいた。長期休みしか実家に帰れないので中国人の友人は大分興奮気味であったが、それを考慮しても、彼女の家族や親戚への気遣いや思いやりは大変すばらしく、感心せずにはいられなかった。滞在中、いつも目についたのは、年配の親戚の体調を気遣ったり、年下の従兄弟には兄弟同様に接し世話をしあける彼女の姿勢であった。もっと食べなさいよ、と私のお茶碗にはいつも大量のおかずが面白いほどに盛られていく。夜、旧正月を祝うCCTVの祝賀番組を楽しみ、カウントダウンと共に爆竹の音に驚き（実際私も巨大爆竹を友人らと体験し）、朝には甘くて頬が落ちるお汁粉を堪能し、昼はマーじゃんにカードゲーム、夜は総勢何十人にもおよぶ親族一同囲んでの新年の挨拶と、円卓からはみ出るほどのお節料理の数々。一人ひとりが、健康と成功の挨拶をして親睦を深めてゆく。だが何よりも心にぐっと沁みるのは、親族一同みな本当に明るく楽しそうに過ごしているところなのだ。みんな、心から新年を慶び、親族一人ひとりを気遣って思いやっている。そんな雰囲気、こちらにひしひしと伝わってきて、私は日本でのお正月を少し思い出していた。正月3が日というと、新年の

親戚への挨拶を「しないといけない」、みんなで集まって食事しないと「いけない」…。そんなふうに、義務的に、儀礼的にお正月を過ごしてきた自分！形式だけの行事に、どれだけの意味があるのだろう。先ほどにも言ったように、「言葉」にも心がこもっていないと伝わらないのと同様、「行事」にも気持ちがこもっていないから、全てを形式的に捉え、何を感じることもなかったのだとまた悟った。

その中国人の友人に、寧波到着の当日に尋ねたことがあった。「一人っ子で、家族や親戚からとても期待されて、プレッシャーが大きいと感じることはあるの？」と。彼女は「そりゃあ、勉強は忙しいし、大変だよ」と答えてくれた。それが、寧波での3日間を過ごし、私は彼女の答えにはもっともっと深みがあるのだと感じていた。たしかに、一族からの期待だけならきっと彼女はとっくに押しつぶされているのかもしれない。けれど彼女の家族は彼女をいつも温かく見守り、支え、励ましてくれている。愛が満ちているのだ。そんな人たちに囲まれたら、勉強に精を出すことも彼女にとっては当たり前のことなのだ。そして、受けた愛に感謝しながら香港という土地で勝負し、帰省すると精一杯親戚に孝を尽くす。「小皇帝」という一人っ子の揶揄言葉が全く似合わない友人である。非常に貴重なことを学んだ寧波での旧正月であった。

香港での交換留学が後半にさしかかった頃、私はとても大切な中国の友人と別れなければならない経験をした。辛い時にいつも励まし、支えてくれたかけがえのない人だったが、もう会うことができないのだと絶望の淵にいた時、ふと思い立ったのだ。南京へ行こう、と。

なぜ南京へ駆られたのか。かつては一国の首都となった都市であり、日中関係の背後にある歴史についても考え直してみたかったからでもある。4日間の滞在中に、南京大虐殺記念館へ行き、献花をし、宿泊先の旅舎では自分の率直な意見を中国や台湾人の若者に伝え、意見交換をした。始めて、「自ら学び、自分の頭で考える」ということの重要性を感じた。自分にとって、日中関係について考えるということは香港留学中全くといっていいほどなかった。それは、香港もかつて日本の統治の下にあったとはいえ現在それを感じるものがほとんどなく、一方で現実経済では日本の流行やそれに附随した製品が売られ、日系企業が数多く存在し、ビジネスや日本のカルチャーに影響を受け自発的に日本語を学ぶ香港人も大変多いというのがあるからかもしれなかった。経済的、大衆文化的繋がりには

かり目が行き、歴史的なことを考えようとしなかった自分がある。香港自体も激動の歴史を積み上げ、実際この街の経済的発展は移民が作り上げてきたという歴史からも、香港人の友人やその家族と過去の歴史の話になると、どうしても彼らの話が詰まってしまうことがあったのも事実ではある。

そうやって、香港では過去の歴史を考えることから逃げてきた私であったが、南京を訪問し意見交流ができたことで、ほんの少しではあるが、過去と未来についてじっくり考える機会がもてたのだと思う。旅舎で親しくなった30代の台湾人が言っていた。「君が今南京に来て歴史について考えている。そのことが未来につながっているんじゃないかな」と。この言葉が今の私を支えている。南京の歴史だけでなく、台湾の歴史についても詳しく知らなかった私。新しく人と出会えば会うほど、自分には知らないことだらけであることを知る。無知ほど恐ろしいものはないと言える。知らないから、相手の立場を考えず傷つけていることもあるのではないだろうか。人との出会いという「縁」が私に、人を慈しむためにはまず色々なことを学びなさいと教えてくれているのだろう。

大学が休み期間だから南京を旅行しているんだよ、と言った同い年の山東大学の女子大生がいる。よくよく聞いてみると、故郷のある農村で大学に通わせてもらっているのは自分くらいだという。苦勞して大学に入れてもらい、勉強にいそしんでいるようだった。だから「南京への旅は本当に自分へのご褒美」だと。

もう1人、衝撃を受けたのは、同じくその旅舎で出会った男子高校生。今年からオーストラリアの大学へ予科を経て入学する予定だと言っていたのだが、彼に「あなたにとって、将来の理想の自分とは？」と真に漠然とした質問を投げかけてみた。彼は「大学を卒業して、海外で仕事をして、借金をしてまで海外の大学に行かせてくれた両親、そして将来の妻や娘をちゃんと養える自分」と答えてくれた。自分がやりたいことだけやって人生を送っていけばいいと楽観していた私に釘をさすような答えだった。また同時に、彼の答えから、その底にある現代中国のさまざまな事情を少し垣間見ることができた。

南京滞在後、日帰りで揚州へ赴き、唐僧の鑑真が修行していた大明寺を訪れた。歴史的な人物を前に、自らの信念や軸がしっかりと安定しブレなければ、それらはこれから何が旅路や異国で待ち構えているのかという不安さえも消し去ってくれるのであろう、と感動

せずにはいられなかった。信念を貫くということ、これが自分に足りていなかったことなのである。(留学を終え日本に帰国後、鑑真が過ごした唐招提寺を訪れて、改めて彼の信念の深さに畏敬の念を抱き、心が熱くなった。)

南京・揚州訪問を終え、香港に戻り私の留学も終わりに近づいてきた。ようやく少しずつ自分の「軸」について考えるようになった。これまで出会ってきた中華圏の友人達に教わったこと。「自分らしく自信を持って生きる」ということ。人と自分を比べないということ。自分の幸せは自分にしか決められないということ、である。それを体得し、帰国できたことが大きな収穫であり、辛いときに私を支える自信となっている。

私が留学中、中華圏の友人たちの何に共通点を見出したかということ、それは「思いやり」なのである。底知れない深い、深い愛を私はいつも彼らから感じていた。そのおもいやりは一体どこからやってくるのか。それが少し見えてきたのである。つまり、自分の信念や軸がしっかりとしているということ、家族や友を非常に大切にすること、なのではないかと。日本でもこれほどの「思いやり」を感じて生きていきたい。心からそう思う。日本がもっと一人ひとりが大事にされて、暮らしやすい国になっていければと思う。そのために私は尽力していきたいと考えている。1人ひとりが、自分は自分で良いのだと納得し、胸を張って生き、まわりの人間を思いやり合える社会を私は作っていきたいのである。そのような社会づくりを、今後自分が大学を卒業し社会参加していく上で目指していく所存である。仕事においても、仕事以外でも、いくらでも私にはできることがあるはずだと信じている。また、それが私にとって「恩返し」というべきものである。

お別れしなければいけなかった中国人の友人とも、縁があって出会ったのだからきっといつかまた会えるのだと思う。香港や中国でいつも囲んでいた円卓のテーブルのように、1つの円になって本当はみんなつながっているのだから。